

年間第15主日

第一朗読 申命記 30・10-14
第二朗読 コロサイ 1・15-20
福音朗読 ルカ 10・25-37

2025.7.13 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

今日の第二朗読は、使徒パウロのコロサイの教会への手紙の始めの方の部分が朗読されました。このコロサイの教会への手紙の主なテーマの一つが、「聖書と典礼」の説明にも書かれています。コロサイで人々に非常に影響があった考え方——この世の中は目に見えない何か霊的な力によって動かされているので、人はその霊的な力と繋がる儀式と言いましょうか、何か特別な方法を見いだすならばいろんなことがうまくいくんだというような考え方——がコロサイの人々に非常に影響を与えていて、教会の中にもそういう考え方が入ってきた。でもパウロは、キリスト教はそういうものではないよ、ということを、キリスト教、わたしたちが述べ伝えた教えは——キリスト教っていう言葉が当時あったか分かりませんけども——それとは違うということを手紙で一所懸命書いているわけです。

イエス様によってわたしたちは救われ、イエス様に従う以外の道がないのだということですよね。そしてイエス様に従う道っていうのは、何か特別な儀式とか、何かみんなが知らない方法を見いだすのではないわけです。

福音書を見れば、イエス様がみんなに伝えたかったことは、全ての人が神様の子として神様に愛されているんだよ、ということですよね。だからその神様の望みを行うということは、神様と同じように他の人を大切にする、そのことへと招かれたわけですよね。

でもそうであるならば、全ての人が大切なんだというメッセージを述べ伝えていて、どうしてイエス様は十字架につけられなければならなかったのかということですよね。

全ての人が大切なんだという一般的なメッセージとして語られているうちは良いけれども、「あなたもあの人も同じだよ」っていうようなことになると、わたしたちは心の中で反発を感じる人が多いのではないかと、そういう意味でイエス様の時代の中では、指導的な立場にある人々が「他の連中と一緒にするな」、あるいは神の民——イスラエルの民——が「他の民と自分たちと一緒にするな」、そういうような、「ローマ軍と自分たちが一緒か」というような反発の中で、イエス様を排斥していったということですね。

そういうことであるならば、それは「当時の人はバカだな」と言っているわけにはいかない。わたしたちの心の中にも「具体的ないろんな人の顔を思い浮かべてください」ってなったときに、「あの人と一緒にしないで欲しい」っていうような思い——いろんな切り口で、ですね——人はどんなことでも他の人と自分を比べて自分が優位に立つような——それは必ずしも社会的な地位とか財産とかには限らない、自分の方が苦労してるとか、自分の方が分かっているとか、いろんなことですが、真面目にやっていると、そういうようなことで、「あの人と一緒にするな」っていう思いは多かれ少なかれわたしたちの心の中にあるのではないかと思いますね。

で、それがイエス様を排斥し死に追いやるんだ。そこまで重大なこととは思わなかったかもしれないけど、でも福音書のストーリーを見ればそれはつきり出てきていると言わなければならないんじゃないかなと思うんですね。

で、今日の福音の中では、イエス様が律法の専門家——熱心に神様の教えを生きようとしてる人——との会話の中で、サマリア人っていう人たちをわざわざたとえ話に出してきていますね。サマリア人っていうのは、当時のユダヤの人たちからすれば、神様から見捨てられている、関わるのも嫌だっていう、そういうような人たちなわけです。でもその「サマリア人」っていう言葉というか、それを言わなければいけないような質問、たとえ話を構成し、質問されています。「その三人の中で誰が隣人になりましたか」。でもその聞かれた人は「サマリア人」っていう単語を発音したくないので、「その人を助けた人です」って、わざ

わざそういうふうな答えをしていると思われるんです。熱心なユダヤの人だからね。

でもそのことによって、会話の中で、何々人とか、何とか、社会的地位とか、祭司とか、レビ人とか、サマリア人とか、そういうラベルを奇しくも自分で剥がして、「その人を助けた人です」っていう、一人の人としてそのサマリア人を表現せざるを得ないというようなところに導かれたと言ってもいいのではないかと思います。

宗教というものが、本当に人と人とを、全ての人をつげていく、そういう神様の御心^{みこころ}、そしてそのための力をわたしたちに与えるものでなくてはならないけれども、しばしば、それが、自分が他の人とは違って良いのだと、あるいは、分断^{わか}していくっていうものになってしまうのならば、それは——基督教に限らず、ですけども——本当の宗教の意味ではないし、神様の望んでいることはそれではないのだということを、いろんな形でイエス様がいつもわたしたちに語りかけ続けているのではないかなと思います。

今日の第一朗読の最後の言葉。「御言葉^{みことば}はあなたのごく近くにあり、あなたの口と心にあるのだから、それを行うことができる」。何かとんでもない——エルサレムにお参りに行かなければいけないとか、何か途方もない非日常的なことではないのだと、御言葉を行うっていうのは自分の身の周り、そして自分の心の持ち方、そして言葉そして行動に宿っていなければならない。で、それは根本的には全ての人^{ひと}が神様によって大切にされているし、その同じ心へわたしたちは信仰によって招かれた、神様とおんなじ心で互いに大切にし合う、そこへと招かれた。で、それを具体的にわたしたちのいろんな言葉や行動、周りの人との繋がりの中で表すにはどうしたら良いのかということを、絶えずわたしたちはイエス様との対話の中で教えていただくことが必要だし、そのためにはその神様の、イエス様の助けは限りないんだと信じていますね。今日のミサそのものも、いつもそのことを思い起こす式でなければならないと思います。

わたしたちが絶えず自分自身の持っている、あるいはわたしたちが所属する社会の持っている狭さというか、偏見や分断いうことを助長するのではなくて、むしろそれを癒していく、そして自分自身もそういう心の中にある他の人と自分を分け隔てるような思いから癒されて、イエス様の望んでいらっしゃることを共に行うものと変えられていくように、絶えず導きを願ひ続けたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>